
非常事態発生??

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非常事態発生??

【Nコード】

N2902I

【作者名】

来実

【あらすじ】

学校で地震がおきて、クラスメートたちと教室で一晩すごす事になった平次と和葉のお話です。

（前書き）

甘めです。文章読みづらいかもしれませんが、よろしく願います。

2月の終わりの昼休み。
あたしらは普通に友達と
教室でおしゃべり
しとったん。

「…あ、れ？なんか揺れてへん？和葉？」

「え？き、きやああ！」

いきなり床が揺らいだ。
相当大きな地震だ。
クラスメートは皆急いで机の下に隠れた。
しかし、和葉と美奈の側にはちょうど机がなく、その場で難を逃れようとした。

「か、和葉！上！」

「へ？…！！」

アスファルトの天井が崩れて、
あたしに向かって落ちてきた。

もうだめだと思って目をつむった瞬間、
体が一瞬ふわっと浮いて、床に叩きつけられた。

目をあけた先には、幼馴染。

「…怪我ないか、和葉」

「へ、へーじ…」

「ぼけっとしおってからに。もう少しでお前、ぺちゃんこやったぞ」

「ゴメン…ありがとう…」

「なんや。素直やな」

「だって」

「…で、怪我は」

「床に頭うつてたんこぶなっただけど、それだけや」

平次はいちおうそのたんこぶを確認してから、

「なら、ええわ」

と、ぶっきらぼうに言った。

すると、まるでそれが合図であったかのようにクラスメートが駆け寄ってきた。

「大丈夫和葉!？」

「服部君、かあっこいいー！」

「やるなあ服部！」

「さすが夫婦だ」

「「夫婦とちゃう!」「」

そんな話をしつつ、次第に男子と女子とに分かれていった。

美奈が、こそつと和葉に耳打ちする。「服部君、あんた助ける時、一瞬も迷わず飛んだで？愛されてんな」

「そんなんちゃうって」

否定しつつも、顔が赤くなるのを隠せない和葉であった。

と、その時、放送のベルが鳴った。

ピンポンパンポン♪

「緊急放送緊急放送。ただいま、震度6強の強い地震が発生しました」
……………」

放送が終わった後、クラス内は啞然とした。

「……ここで寝泊まりせえっちゅんかい……」 「……年頃の男女をひとつの部屋に寝かすて、どっいうことやねん……」

「まあ、大勢やから変なことにはならんて、確証があるんやろな」
「先生ら、適当やなあ」

放送の内容は、こう。

「——地震のため住宅街も、火事や家屋倒壊など多数被害がでています。この学園は緊急避難所に指定されているため、住民の方々が体育館に避難されており、申し訳ありませんが生徒が寝泊まりできる場所は教室のみです。机を廊下にだし、余震に気をつけて待機して下さい。」

「おい、服部と遠山、これを機にくつついたらどうだ？」
「せやせや、折角一晩中一緒なんやし？」

「うちと平次はそんなんちゃうって!!」
「せや!大体なあ、和葉と一晩一緒なくらい、今更やっちゅうねん
!」

「「え?」」

「しまった」
「なに自爆しとんねん平次！」

「どーゆーことやねん服部！」

「洗いざらいはけ！」

「やかましわ！」

この時のこの教室は隣のクラスが耳を塞ぎたくなるくらいうるさかったらしい。

#

「…平次。もう寝た？」
「…起きとる」

騒ぎはあったが、結局そんなこんなで夜を迎え、教室でごろ寝している。教室といっても私立改方学園。30人が足を伸ばして寝ても、余裕の広さだ。

「皆、寝るん早いよね」

平次は、和葉の隣にいた。ちょうど女子の端にいたのが和葉で、他の男の隣に寝かすわけにいかないと、さりげなく隣にきたのだ。もちろん、仲間には冷やかされたのだが。

「疲れとったんやろ。でかい地震やったし、被害もやばいみたいやん」

「……………」

「和葉？」

「…お母ちゃん、安否わからへんねん…」

「和葉…」

「体育館にはおらんかったし、連絡もとれへんし……。あたし、不安…やね…ん…っ…ひつく…」

「…泣くなや…皆起きてまうで…？」

「…せや、けど…っ…うっ…」和葉が泣き止む様子はない。

（こら、最終手段しかあらへんな…）

「和葉……来なや。」

平次が毛布のすそをあげておいでおいでする。

「…おいで言うとなんや」
「…うん」

和葉が平次の腕の中に収まる。そのまま、平次は和葉を抱きしめる形のまま、背中を優しくさすって、髪をなでた。少しずつ、和葉が落ち着くのがわかる。

「昔からお前は、こうするとすぐ落ち着くやんな」

「…うん…」

平次は、まだぐすぐす言う和葉の髪をなで続けた。

「…落ち着いたか？」

「…うん、まあ、大丈夫やねん。ありがとな、平次」

「タコ焼きおごれや？」

「わかつとる」

「よし。…それから、和葉の母さん、きつと心配いらんで？うちのオカンがほっとくわけないからなあ。多分二人で一緒におるわ」

「…うん…。…なあ平次…その…。…腕…」

「今日はとりあえずここにおり。頭のたんこぶ痛いやろし、一人んなったら、どうせまた泣くんやろ。」

「…うん…。平次の体温、落ち着くねん…」

「…っ！……………おおきに。」

「平次、おやすみっ」

そう言っつて、和葉はすぐ眠りに落ちてしまった。

「寝顔は昔から変わらへんなあ…」

眠っている和葉のほっぺをちょん、とつつく。

腕の中のコイツが愛してくてしょうがないと思ってる事は、誰にも秘密。

「……おやすみ、和葉」

##

「……うん……ん……？」

目を覚ましたのは、和葉。

「……平次……」

ふいに平次の体温を感じて、猫のように顔を平次の体にこすりつけた。

「…なにしてんねん」

「へーじ…起きとったん？」

「あほ。今起き……………」

「お前らなに見てんねん！」

「……………えっ!？」

平次の言葉に、和葉もガバツと起き上がる。なんと、クラスメートの一部が平次と和葉のやり取りを見ていたのだ。

「驚いたでえ? 起きたら、服部と遠山があんな風なっとなんやか
らなあゝ」

「和葉らぶらぶやねゝ」

冷やかす者もいれば、嫉妬の目でみる者、羨望の目でみる者など、
様々だ。

「せや! うち昨日毛布の中で起きとったたら、服部君と和葉の、超ゝ
らぶらぶな会話聞こえてきてんで!」

「俺も起きたったで! 服部結構気障な所あるんやな」

「え、そうなん！？教えて教えて！」

「うちも起きとつたらよかったあー」

「や、やめい！ああ、くそ！和葉、逃げんで！」

「ええ！？ちょ、平次！？」

バタバタバタ……

「仲良うおててつないで逃げよつたな」

「せやね」

ふたりの春は
もうすぐそこ――

Fin .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902i/>

非常事態発生??

2010年10月9日05時23分発行